

お大師まいり

登戸と歩く

匝瑳探訪

-83-

春の風物詩とされるお大師まいり(遍路)の季節となりました。

4月5日から13日までの9日間、旭市と市内にまたがる八十八か所のお寺を巡る「お大師まいり」が行われます。

お大師とは真言宗を開いた弘法大師空海のこと、この地域の巡礼ではお箱と呼ばれる笈(厨子ともいう)に納め

られた高さ60cmほどの弘法大師の木像が背負われ寺を巡ります。

この大師像は、登戸区の渡辺洪介さん宅に保管されています。同家に伝わる言い伝えでは、先祖が四国遍路に出かけ、願いがかなった1860年に第三十三番札所雪隠寺からもたらされたものだといいます。十数年前、渡辺さんが四国遍路で同寺を訪ねた時にもそれを裏付けるような言い伝えを聞くことができました。

渡辺さん宅に保管されている弘法大師像



このお大師まいりは、1785年に野中(旭市)長禅寺住職が下総の香取・海上・匝瑳の3郡と上総国山武郡を四国になぞらえたことが起源とされています。これと関連するのが、大浦(匝瑳地区)蓮花寺には、同寺が「四国八十八ヶ所八十四番屋島寺」と門柱に刻まれ

ています。また、新(豊栄地区)では、1820年秋からおよそ8か月をかけ、四国遍路を行った人の納経帳が伝わっています。

お大師まいりはその後の変遷で、長禅寺の遍照講と八日市場・福善寺の海徳講が年ごとに結願寺となりました。寺や集落のお堂の前では、一行をもてなす「お接待」も行われます。

江戸時代の登戸村は、1843年ごろの家数12軒の小さな規模ながら、1718年に「登戸村」の講中で庚申塔を建て、1751年には村の男女が「十九夜塔」を、1813年に「子安大明神」をまつりました。

地域のまとまった活動は平成の今日まで続き、同11年には新たに「登戸神社」をまつりました。神社の由緒に「登戸区には神社がなく、三社神社(東小笹区)の氏子であった。登戸区は大字なるが故に区としての神社を持つことが区民の願いであった」と刻まれ、地域に根付いた意識が感じられます。

(元)市職員・依知川雅一

岡秘書課広報広聴班

☎73・0080